

<メディアウオッチ> 大飯原発「再稼働」問題で気になった紋切型報道

上出 義樹

ニュースの核心や新たな事実に向かい迫ろうとせずに想定内の事柄だけで済ませてしまう報道が好ましくないのは言うまでもないが、それに近い紋切型の新聞記事が先週末、定期点検で停止中の関西電力大飯原発3, 4号機（福井県おおい町）の再稼働問題で散見された。

原子力安全委は朝日の見出しにある「妥当」の判断をしていない

とくに気になったのは、再稼働の是非を判断する目安として注目された3月23日の原子力安全委員会の評価結果を報じた朝日の同日付夕刊1面の記事と見出し。

同日の安全委員会は当初の予定を2時間繰り下げて午後1時から臨時会議を開催。経済産業省原子力・安全保安院によるストレステスト（耐性検査）の評価などを確認する審査文書を了承し、傍聴者の怒号の中でわずか5分で会議を終えた。安全委員会がストレステストに関する確認文書を示すのは大飯原発が初めてとあって、各紙とも翌日の朝刊を含め大きく報道。このうち、朝日の同日夕刊の第一報には、安全委員会が再稼働にお墨付きを与えたように読み取れる「大飯原発『妥当』と判断 ストレステスト 安全委が確認文書」の見出しが付けられていた。

安全委の確認文書は、ストレステストの一次評価で「一つの重要なステップ」があったことなどを記述しているほか、重要な評価項目で保安院が「妥当性を確認」したことに触れている。こうした確認文書の内容や、締め切り時間の関係などから『『妥当』と判断』の紙面になったのだろう。「妥当」の文言は、他紙の一部にも見られた。

先入観感じる短絡的な記事

しかし、23日の安全委員会とその後の記者会見を直接取材した筆者(上出)が判断する限り、朝日の第一報はあまりに短絡的な内容と言わざるを得ない。

安全委の確認文書ではまず、「何らかの基準に対する合否判定を目的とするものではない」と明記されている。関電が行ったストレステストの評価結果についても、一次評価が「簡略な方法」で行われたことや、まだ手をつけていない「二次評価を速やかに実施」し、「安全性向上に向けた継続的改善に努めることが肝要」など、改善の要望や問題点などを多々指摘。さらに、夕方の記者会見で班目（まだらめ）春樹委員長は、『『妥当』という書き方は一切していない』と説明。原発の安全性や再稼働の是非を判断するのはあくまでも保安院と政府であることを強調している。ただ、記者たちから「安全委の責任逃れでは」と質問され、「安全委のやれることには限界がある」と弁明する一幕もあった。

結果的に再稼働の流れを後押し？

未曾有の福島第一原発事故を防げなかった責任を含め原発のお目付け役としての役割など

にさまざまな批判が聞かれる安全委を擁護するつもりはないが、今回示された確認文書の内容や班目委員長の記者会見での発言などを素直に読み取れば、全体として安全委が、①再稼働に向けた安全性の判断を回避②ストレステストの評価結果などについて諸々の問題点を指摘した—ことこそ記事の見出しに取るべきではなかったのか。安全委によるこうした問題点の指摘にほとんど触れていない朝日の第一報からは、「保安院イコール安全委」とのある種の先入観が感じられる。結果として、再稼働に慎重な朝日自らの論調にも反して、読者に「安全委はやっぱり大飯原発の再稼働に賛成なんだ」との印象を与え、再稼働に向けた流れを後押しするような紙面内容になった感を否めない。

朝日は翌日の朝刊では再稼働に反対する大阪市の動きなどを大きく報じているが、班目委員長の記者会見の内容を最も詳しく報じていたのが、読売などと同じく大飯原発再稼働の政治判断を政府に求める産経新聞だったのは、皮肉と言うべきか。

(かみで・よしき) 北海道新聞社で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院博士課程(新聞学専攻)在学。